

2022 年度 茨城キリスト教大学 FD 報告書

授業改善委員会
(2023 年度)

2023年5月15日

学長 上野 尚美 殿
副学長 梶田 泰孝 殿
文学研究科長 David C. Yoshiba 殿
生活科学研究科長 石川 祐一 殿
看護学研究科長 松永 恵 殿
文学部長 池内 耕作 殿
生活科学部長 山中 俊克 殿
看護学部長 栗原 加代 殿
経営学部長 申 美花 殿

授業改善委員会 2022・2023 年度委員長
生活科学部心理福祉学科 櫻井 由美子

平素より、授業改善委員会活動にご理解とご尽力賜り感謝申し上げます。本学「授業改善委員会規程」第3条の4)により、2022年度に行われました各研究科、学科の授業改善活動について以下のとおりご報告いたします。

全学 FD・全学教養課程センターFD

日 時：2022 月 11 月 29 日 14:30～16:00

場 所：6202

参加者：専任教員 32 名

テーマ：授業運営の能力開発—教授法の科学と技術—

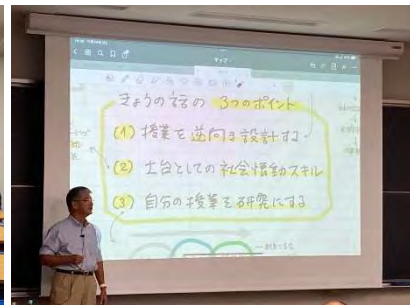
1. 実施目的と概要：

本学の教育全般の底上げとブラッシュアップを目的に早稲田大学向後千春教授をお招きして授業改善委員会との共催全学 FD を実施した。研修テーマは「授業運営の能力開発—教授法の科学と技術—」であり、教授法に関する実践的かつ科学的な手法についての演習形式のワークショップであった。

2. 研修内容：

本 FD では「教える営み」を科学的に探究する Instructional Design (ID) に関するワークショップ型の研修を行っていただいた。大学教育を展開するうえで、①授業の逆引き設計、②学びの土台としての社会情動スキル、③自らの授業の研究化の3つの重要性を

学び、その実践に向けた工夫と実際を向後先生のご経験も交えてご講演いただいた。さらに、こうした授業設計におけるグループワークの大切さも学び、大学教育では学生たちの心理的安全性を保ちつつ積極的にグループワークを取り入れた授業をしていく必要があることが確認された。なお、グループワークへの参加をためらう学生に対しては、促しは行う一方で決して無理には行わないこと、2-4名規模のグループが適切であること、100名を超える場合であっても展開可能であることなど、具体的な留意点と示唆をいただいた。またeスクールによって2000年代初頭よりすでに高度なオンライン学習環境を整備してきたご経験から、オンライン授業と対面によるライブ授業との差異についてもお話があり、ポストコロナ期において双方の教授法を本学学生にフィットした形で展開することの大切さを改めて考える機会となった。



報告：佐々木 隆宏（全学教養課程センター）

文学研究科

大学院文学研究科の2022年度のFDは、特別公開講座(Special Lecture Series: SLS)とタイアップで、サンフランシスコ州立大学名誉教授のサンドラ・リー・マッケイ博士による講座：Globalization and English: Implications for Language Use and Pedagogy（グローバル化と英語：言語の使用と教え方への示唆）をオンラインで実施しました。

<セッション1> 8:00 ~ 9:30

Globalization and the Spread of English（グローバル化と英語の拡散）

<セッション2> 9:40 ~ 11:10

Native Speakers: Definitions and Images（英語母語話者：定義とイメージ）

<セッション3> 12:00 ~ 13:30

Teaching English as a Global Language（グローバル言語として英語を教えるとは）

セッション1では、グローバル化と英語使用者の広がりにより非英語母語話者による英語

使用が母語話者の3～4倍になっていることなど、改めて現在の英語の状況を認識できました。セッション2では、具体例をグループで討議しながら「ネイティブスピーカー（英語母語話者）」の条件を議論しました。Native speaker 以外の用語 Expertise(専門家)や Ownership(所有者)という考え方も紹介されました。セッション3では、このように英語が多様化している現在、どのような英語を英語の授業で教えるのか（許容するか）について考えました。

学外からの2名、学園関係者（教員および大学・大学院生）8名、計10名の参加でした。大学院文学研究科の教員は、出張中の上野先生と学外業務があった東海林先生以外の全員、ヨシバ研究科長、三輪先生、ジャブコ先生、村上が参加しました。

報告：村上 美保子（現代英語学科）

文学部

【現代英語学科】

1. 前期（7月）

題目：駐日ウクライナ大使講演（現代英語学科特別公開講座）「新時代におけるウクライナと日本：社会文化的側面から考える」

内容：駐日ウクライナ特命全権大使による特別講演と質疑応答

講師：セルギー・コルスンスキー博士、ユリヤ・ザモルスカ2等書記官（通訳）

日時：2022年7月14日（木）16:00～17:30

場所：茨城キリスト教大学 キアラ館

参加：下記参照

- 現代英語学科教員9名（上野学長のぞく）— 82%参加
- 学園教職員17名（DCEインターン1名を含む）
- 学生49名、
- その他、マスコミなど：9名

合計83名（ライブ配信およびオンデマンド配信の視聴者は含まず）

概要：

本講演会は、当初は現代英語学科のFD活動として企画されたが、ロシアによるウクライナ侵攻への社会的な注目の高まりを受け、最終的には、上野学長、吾妻事務長、岩間地域国際交流センター長が責任者を務める、大学主催のイベントとして実施された。立案から実施までの流れを以下にまとめる：

- ① 2020年
ジャブコ先生がウクライナ大使に講演依頼、快諾される。
- ② 2021年
コロナ禍の為、講演会中止
- ③ 2022年2月24日
ロシアがウクライナへの侵攻を開始
- ④ 2022年4月26日
ウクライナ大使講演による前期FD活動を科会にて決定

- ⑤ 2022年5月24日
ウクライナ情勢への社会的関心の高さを鑑み、地域国際交流センターとの共催となる。
- ⑥ 2022年6月16日
学科主任から学長へ、講演会実施についての報告書提出
- ⑦ 2022年7月23日
学長と理事長との相談の結果、講演会の責任者が大きく変更される。
(全体責任者：上野学長、
受け入れ態勢全体責任者：吾妻事務長、
各部 局責任者：岩間地域・国際交流センター長)
- ⑧ 2022年7月08日
安倍元首相が演説中に銃撃され、亡くなる。本講演会の警備体制が見直される。
- ⑨ 2022年7月14日
警官による警備体制が敷かれる中、講演会実施、無事終了
- ⑩ 本学ホームページに、講演会の開催報告が公開される。
(<https://www.icc.ac.jp/academics/literature/eng/news/detail/20220722.html>)

上記の通り、本講演会は、コロナ禍、ロシアによるウクライナ侵攻、安倍元首相の暗殺など、様々な重大事件によって社会情勢が揺れ動く中で行われた。その結果、本来現代英語学科の教員のみを対象とするFD活動が、当初の想定を大きく超え、最終的には学長を総責任者とする大学主催の特別講演会として実施されることになった。本講演会の立案から実施に至る一連の過程を通して、学科として他部署と連携や今後の講演会等の運営を考える上で、大きな経験値を得た。又、ウクライナ大使館より同伴した二等書記官による、ウクライナ語から日本語への逐次通訳の現場をリアルタイムで見聞することができ、現代英語学科の教員および学生にとって、大変貴重な体験となった。

駐日ウクライナ特命全権大使の視点から語られたコルスンスキー博士の講演は、聴く者の心を揺さぶり、私たちが普段意識出来ていない世界の現実へと改めて視野を広げる機会となった。これは「真理を探究する」という建学の理念、ひいては学問の根幹に関わることであり、その意味で、本講演会は学科FD活動として大きな意義があったと言える。

茨城キリスト教大学 現代英語学科
2022年度 特別公開講座

Ukraine and Japan
in a new era of
Global Transformation:
The Sociocultural Aspect

新時代における
ウクライナと日本
～社会文化的側面から考える～

How is the world order changing now?
What might happen after Ukraine wins Russia's war?
What role do the sociocultural factors play in it?
今、世界秩序はどうか変化しているのか、社会が果たす役割とは、

Dr. Sergiy Korsunsky
セルギー・コルスンスキー博士
駐日ウクライナ大使

1991年キウコウ大学文学部卒業
2002年～2006年、駐米ウクライナ臨時代表
2006年～2010年、駐米ウクライナ代表
2010年～2014年、駐米ウクライナ代表
2014年～2018年、駐米ウクライナ代表
2018年～2022年、駐米ウクライナ代表

2022年(木)
7月14日
16:00~17:30

茨城キリスト教学園 キアラ館礼拝堂

使用言語：英語(同時通訳付き)

ライブ配信(無料)
申込はこちらから
先着120名様

学内関係者のみ、入場可。一般の方は、ライブ配信かオンデマンド配信のみとなります。
直接入場、ライブ配信、オンデマンド配信、いずれも上記QRコードよりお申し込みください。

問い合わせ先：茨城キリスト教大学 地域国際交流センター 0294-52-3215

2. 後期 (11月～)

題目：授業見学・評価・フィードバック

参加：

- 9名/11名(参加率 82%)
- 詳細は下記「教員担当授業/参観授業一覧」参照
- 上野学長の参加も頂いたが、上記の参加率の計算には含まず

概要：現代英語学科専任教員間において授業見学を行い、当該の教員間において個人的にフィードバックと建設的批判を目的とする意見交換を行った。

報告：舘野 真（現代英語学科）

【児童教育学科】（専任教員 24 名）

1. 実施目的

児童教育学科では、2022 年度のカリキュラム改定に伴い、2022 年度の入学生より、いわゆるゼミに当たる授業が、各学年 1 回ずつ配置されている。1 年次のゼミは、大学初年次教育として、大学全般での学びとともに、児童教育学科の学びに必要な基礎知識を演習形式で学習することを目的としている。また 3 年次および 4 年次のゼミは、希望する専門領域の専門性を深めるための学習を行うことを目的としている。しかしながら、2 年次に実施されるゼミについては、位置づけおよび内容が明確でない。したがって、本 FD は、2 年次ゼミの内容や位置づけを明確にすることを目的に実施された。

2. 概要

本 FD は、2022 年 12 月 6 日 14:30-16:00 に開催された。参加者は児童教育学科の教員の 16 名であった。児童教育専攻の主任である高橋和将氏から、ゼミに関わるカリキュラム改定の目的と内容について、話題提供を頂いた。その後、児童教育学科の三橋翔太氏より、2 年次ゼミの位置づけを 3・4 年の専門教育の前段階に身に付けるべき能力と、現在の 4 年生がどのような理由で 3・4 年次のゼミ選択を行ったか紹介することから、2 年次のゼミで行うべき内容を示した。また具体的な 2 年次ゼミの授業計画を提案し、それについて意見を交わした。その際に出た意見としては、評価をどのように行うか、どこまでの知識を提供するのかといった内容であった。それらを基に、令和 5 年度より開始される 2 年次ゼミの充実に向けて、授業計画や目標が見直されることになった。

報告：三橋 翔太（児童教育学科）

【文化交流学科】

【概要】

- * 日時：2023 年 2 月 14 日（火）
- * 場所：茨城キリスト教大学 1 号館 1201 教室
- * 形式：対面を主としつつ、オンラインも併用（カンボジア滞在中の教員 1 名が参加）
- * 講師：筑波大学人文社会系准教授 澤田浩子先生
- * 講演：多文化共生社会のための人材育成と地域支援の循環
—外国人児童生徒教育の課題をめぐって—
- * 内容：第一部 講演 澤田浩子先生
第二部 本学からの問題提起 「外国ルーツの子供達の支援事業—IC with U プロ

ジェクトー」 岩間信之

第三部 討論会（県北地域における日本語ボランティア活動の現状、本学における日本語教師養成の現状と地域日本語教育機関との連携、他）

*参加：池内耕作文学部長、文化交流学科所属教員

【講演内容】

*第1部 外国人児童生徒教育の課題

（日本の生徒に対する「国語」教育なら、例えば、全国一律に学年によって統一的な教科書選定が可能だが）、来日した外国人児童生徒に対する「日本語教育」においては、その学習者の「年齢、入国年齢、滞在年数、母語」（四大要因）が異なることによって、個々に合わせテキストや指導法が求められる。また、日常会話の能力と学習における言語能力とは個人によって異なるので、その双方のバランスを取った教育が必要である。その上、対象児童生徒は日本とは異なる文化環境で育ったため、アイデンティティや母語保持の問題を抱えている。

※（ ）内は堀口の補い

以上の課題について、各地域・自治体において現在様々な対策が取られている。

*第2部 多文化共生人材の育成を目指した地域連携プログラム—筑波大学の事例から—

今や、学校教育現場で活動できる日本語教育人材の育成は急務であるが、現状では、教師に外国人児童生徒教育の経験的知見がない。そこで、筑波大学では、2019年のリサーチグループの発足を契機として「リサーチユニット」を立ち上げ、地域と連携した教育の実現を目指した。

その中心的な活動は、「茨城県グローバル・サポート事業」との連携であった。特に、県西12自治体19と連携し、大学生による「日本語サポーター」を導入することによって、学習者の教育を実践してきた。

その際重要なのが、「サービスラーニング」の視点である。サービスラーニングは、コミュニティにおける市民性を向上させることを目的として、教育機関における教育課程と、コミュニティにおける社会貢献活動を統合することによって実践される。これには、カリキュラムの統合・多面的ネットワーク・互惠性（大学と地域が対等で融合的なパートナーシップを構築して、相互に深い影響を与え合うこと）の三つが重要であると言える。

【付記】

当日のより詳しい状況については、『2022年度文化交流学科 アクティブ・ラーニング報告書』（鈴木晋介編集、文化交流学科2023年2月28日発行）に掲載されている学科主任志賀市子による「2022年度文学部文化交流学科FD報告」を参照願いたい。

報告：堀口 悟（文化交流学科）

【生活科学研究科（食物健康科学専攻）】

日時：2023年3月8日（水）14時30分～16：00

場所：6号館 6202 教室

参加者：専任教員9名（1名欠席）

テーマ：グローバルな視点からの食料・栄養

演者：国際農林水産業研究センター研究員 白鳥佐紀子殿

実施内容：

対面での講義形式で行った。世界の栄養不良、食料安全保障、フードシステムについて経済学的視点からのお話と、マダガスカルにおける栄養改善に向けた取り組み及び海外大学と連携した教育プログラムのあり方についてお話を伺った。

まとめ：

普段の業務では触れることのない分野であるが、本専攻科の教育内容の向上に大切な情報を多く得ることができた。先生の講話は良い刺激となり、教員自身の研究においても、大変ためになった。本専攻のグローバル化には、まずは海外の教育施設とつながり、交換留学や単位互換の制度が必要なこと、ベトナムやカンボジア等、栄養士制度を策定途上にある国からの、留学生受け入れ等の体制を整えることが必要であることを伺い、将来構想を検討するうえで、貴重かつ有意義な研修となった。

報告：桐井 恭子（食物健康科学科）

【生活科学研究科（心理学専攻）】

I. 実施目的

心理専門職は対人支援職の一つである。対人支援職には知識だけではなく、ある種の態度やふるまいが求められる。本FDでは、心理専門職を目指す学生に求められる適性を知識・技術・価値観の三要素を中心に議論し、あるべき教育の形について考えた。

II. 概要

FDは、2023年3月18日1000-1055に開催された。参加者は心理学専攻構成教員の6名であった。「心理専門職に求められる知識」としては、“法と制度” “生物心理社会モデル” “専門職としての倫理” などが必要なのではないかという意見が出た。

「心理専門職に求められる技術」とは、“アセスメント” や“人と関わること”、“人の話を（自分の話を脇に置いて）聞くこと” が必要なのではないかという意見が出た。

「心理専門職に求められる価値観」としては、“自己尊重/他者尊重”、“クライアント主体”、“”人”を”人”として大切とすること”などがあげられた。

III.考察

その領域を専門とする専門職は、その領域を生業としていない人とは質的に異なる。また、専門職養成課程において、専門職を目指す学生の“なりたい”という気持ちを尊重することは当然のことであるが、“なれる”かどうかは別の話である。

学部・院の六年間を通したカリキュラムの整備、レディネスを測る/育てる仕組み作り、(本専攻が求める人材を選抜するための) 大学院試験の作問、臨床活動と研究活動の関係などが今後の課題として話し合われた。

報告：黒澤 泰 (心理福祉学科)

生活科学部

【心理福祉学科】(専任教員 13名)

テーマ：『アナウンサーの仕事と心理学』

日時： 2022年7月29日(金)14:20~15:50

会場： シオン館2階 210教室 (または録画視聴)

講師： 向井 一弘 氏 (NHK水戸放送局)

目的：

講師の向井氏は、大学・大学院で心理学を修めたのち、アナウンサーとして活躍されている。そうしたご経歴の向井氏から、心理学の学びが実社会でどのように活かされるか、他者とのコミュニケーションのコツ等に関して、教員と学生を対象にご講話いただいた。

向井氏の講話をもとに、学科での学びが学生の専門性や生きる力をどのように育みうるかを学ぶことがFDの目的であった。

概要：

ワーキング・メモリー等、大学・大学院で修得された心理学のご見識を踏まえ、スポーツ実況を中心としたアナウンサーの仕事や取材・報道の実際についてご講話いただいた。

会場に集う学生・教員は、向井氏のクリアで親しみやすくユーモア溢れる語りにも熱心に耳を傾けていた。ご講義後、質疑応答が活発に行われた。参加者にとって、コミュニケーションについての理解が深まる貴重

アナウンサーの仕事と心理学
NHK水戸放送局 アナウンサー 向井一弘 氏

第一線で活躍するアナウンサーに聞く
社会現場での心理学

2022年7月29日(金)
時間：4限 (14:20-15:50)
場所：シオン館2階210教室

心理学は社会で役に立つ?
パワレンピックとは何?
アナウンサーってどんな仕事?
インスピレーションのコツを教えてください!

2022.07.29 金 14:20-15:50

講演者：向井一弘 (むかいかずひろ) 氏
2001年 北信濃大学人間学部心理学科卒業。北信濃大学
心理学 専攻。NHK水戸放送局。NHK水戸放送局で活躍中。
現在は、NHK水戸放送局でアナウンサーとして勤務。NHK水戸放送局
アナウンサーとして勤務。NHK水戸放送局で活躍中。
NHK水戸放送局でアナウンサーとして勤務。NHK水戸放送局
アナウンサーとして勤務。NHK水戸放送局で活躍中。

主 催：聖光キリスト教大学 生活科学部 心理福祉学科
問合せ：心理福祉学科FD委員 櫻井由美子
メール：y-sakurai@kcc.ac.jp

教員 学生 参加 無料

な機会となり、また、教員にとっては、卒業後の学生の成長・発達を考える好機となった。

報告：櫻井 由美子（心理福祉学科）

【食物健康科学科】（専任教員 16名）

日時：2022年8月9日（火）13時50分～15時15分

場所：7号館7101室

参加者：専任教員 15名(1名オンライン)

実施目的：

2022年5月に実施された厚生労働省の監査を経て、関連する科目の先生毎でグループとなり、各分野の教育目標及び授業内容を確認し、今後の教育内容についてシラバスも含めて再考する。

実施形態：

【社会・環境・公衆栄養分野】、【人体の構造と機能・生化学】、【食べ物と健康・栄養教育分野】、【基礎栄養分野】、【給食経営管理・応用栄養分野】、【臨床栄養分野】のグループに分かれて討議した。

まとめ：

ほぼ全ての各分野の教育目標は、シラバスに網羅されていた・あるいは他の授業において実施されていたことを確認した。専門科目の修得と共に、数学や統計学を活用した分析や解析スキルの向上の重要性が挙げられた。社会に貢献できる学生の育成を念頭に入れ、将来を見据えた授業を行っていくことが重要と思われる。それには、今後より一層、英語・数学・統計学の強化が問われる。

報告：桐井 恭子（食物健康科学科）

看護学研究科

1 第1回「本学看護学研究科教員の実践から地域看護を考える」

1) 趣旨

高齢者人口が増加し、病気になっても入院できなくなる日が近づいている。一方、誰もが健康で長生きしたいと望んでいる。今後、人々の幸福な生を支える看護の場は家庭や地域に

広がり、看護は看護師のみが行うものではなくなるだろう。

しかし、看護師は病院で勤務することを想定して養成されてきたため、地域看護に関する知識や思考が不十分である。学部のみならず、研究科においても、地域看護に関する教育や研究を進める教育課程への改編が急務である。幸い、地域社会への貢献を教育目的とする本研究科の教員は、既に地域で看護活動を展開している。この取り組みを共有することにより、本研究科における地域看護のイメージを共通化し、教育課程の改編に向けた意識を高める。

2) 日時

2022年5月31日(火) 16~18時

3) 会場

8号館4階実習室

4) 参加者

17名(学部教員6名を含む)

5) 内容

趣旨を説明した後、既に地域看護に関わって来た教員が、15分で実践発表を行った。その後、臨床と地域における看護の差異と共通性について協議し、共有した。

時刻	内容	担当
16:00~	趣旨説明	松永
16:15~	日立市内の小中高校における「いのちの教育」の取り組み	渋谷
16:30~	がん患者を地域で支えること～がん患者会活動を通して～	原島
16:45~	母親の育児不安軽減や児童虐待防止への支援	眞崎
17:00~	住民主体の介護予防教室と保健師の支援	叶多
17:15~	学校における子どもの不定愁訴への支援	松永
17:30~	休憩	
17:40~	グループ協議「臨床と地域における看護の差異と共通性」	参加者
18:00~	全体会	参加者

6) 成果

地域看護に関与している教員は半数に上り、地域で生活する人、家族、仲間の安心を保障し、お互いに支え、活かし合うための支援が行われていることを共通理解することができた。

グループ協議のテーマは捉えづらかったようだが、全体協議では「その人らしい生活を知り、活かし、支える」という看護観が共有された。

地域看護として、療養者を支える在宅看護のみならず、全ての人の健康な生を支えるという視点が明らかになり、2024年度のカリキュラム改定に関する協議を進め、改編することができた。

2 第2回「リフレクションからアクション・リサーチへ」

1) 趣旨

社会人大学院生の豊かな経験から生み出される研究は、独自性、有用性が高い。しかし、豊かな経験から Research Question を絞り込むことは難しく、指導は困難を極める。

過去2年間、RQを絞り込むためのFDを実施してきた。提出された修士論文から、成果を確認することができる。しかし、学生は入学前に研究したかったことの一部しか明らかにできないため、達成感を得にくいかもしれない。

そこで3年目となる本年度は、RQを絞り込むのではなく、学生の実践における疑問をそのまま活かすような研究方法を探索した。社会教育分野で、教師が実践を振り返り、よりよい指導方法を開発するためにアクション・リサーチが紹介されていた。そこで訳者による講義と演習から、本研究科で指導可能なアクション・リサーチを体験し、指導に活かしたいと考えた。

2) 日時

2023年3月9日(木) 15~17時

3) 会場

8号館8101教室

4) 参加者

本学教員 23名、地域の看護職者 16名

5) 講師

星槎大学大学院教育実践研究科教授 三輪 建二 氏

6) 内容

教員が研究指導をリフレクションし RQ を設定するという演習に向け、前半はリフレクションについての理解を深めた。学生に間違いを認識させるという、いわゆる「ハウ・ツー」「チェック」のリフレクションという誤解を解き、教員自身の内面(看護観)に基づく関心をもって学生の看護観に向き合うという姿勢について、理論と講師自身の指導経験からご説明いただいた後、参加者2~3人でお互いの看護観を振り返った。

後半の演習では、自身の研究指導についてリフレクションし、RQを設定する予定であったが、前半に十分な時間をかけてきたため、深めることができなかった。

7) 成果

当初の目的には至らなかったが、講師に問われ、参加者がワークシートに向かうしんとした空気から、前半の「リフレクション」への理解の深まりがみられたことは確かである。感想には「対等な対話」という記述が多くみられていた。このことは、研究指導が、氏が指摘した「ハウ・ツー」「チェック」のリフレクションから、看護職者である学生の看護観と教員自身の看護観を通じた対話に変化していくものと予見する。

3 今後のFDの方向性

3年間、研究指導力の向上を狙ったFDを実施した。効果は得られているが、実際に研究指導を担当する教員の人数が限られるため、ニーズの共通化が難しく、更に深めていくことは難しいと考える。

教育方法としては、昨年に続き、教員同士の協議を含むFDを試みた。看護学では古くから教育目標を設定し評価するという教育方法が採用されてきているため、明確な評価ができない教育方法には違和感がある。しかし、アンケートの内容からは、対話によりお互いの考えを理解する機会が求められているようにも思える。教育に関する対話を促すようなテーマを設定することにより、「対話」という教育方法が根づいていくことに期待したい。

報告：松永 恵（看護学研究科）

看護学部

【看護学科】（専任教員 27名）

1. テーマ

看護基礎教育における卒業生との連携において

2. 趣旨

本学部では、すでに15期生が卒業し、県内への就職率も一定数あり、身近に多くの卒業生が看護職として従事している。しかし、学部として卒業生支援の取り組みは行われていないのが現状である。他大学においては、卒業生を対象に、現行の教育へのフィードバックや横断的なキャリア把握のための調査、キャリアアップ研修や卒業教育などのキャリア教育、授業における連携など様々な支援を行うことで、卒業後も大学との接点を継続するしくみを構築し、教育、臨床、キャリア形成のそれぞれへの効果を報告している。

そこで今回の研修会では、身近に多くの卒業生が活躍していることを本学の教育・学修環境の強みと捉え、卒業生との授業での連携に焦点化し検討したい。その理由として、例えば卒業生が授業・演習等の講師として、また様々な教育の場面で支援者として学生と接点を持つことで、

- ①学生：同じ大学で学んだ卒業生に対し親近感を持ち、将来の身近なロールモデルと捉え、学修の意欲につながる。また、自分も卒業後、大学や後輩に積極的に関わろうという意識が生まれる。
- ②卒業生：自分のキャリアを臨床以外の場で発揮できる社会貢献の場となる。また、自身の看護実践の内省や看護観の醸成、学生のレディネスの把握や臨床における後輩教育（プリセプター等）のイメージ化などの機会となる。
- ③大学（教員）：卒業生との意見交換によってそのニーズを知り、教育の質の向上や卒業生支援について検討する機会となる。卒業生とのネットワーク、パートナーシップ構築につながる。

などの効果が期待でき、よって学生、卒業生、大学のそれぞれに意義がある機会となると考える。

本学部は2024年度に開設20周年を迎える。その節目を前に、卒業生支援の一環として、看護基礎教育における卒業生との連携について教員間で検討する機会としたいと考え本テーマを設定した。プログラムは2部構成とし、第1部の講演では先駆的な取り組みを実施している大学からの報告、第2部は教員間のディスカッションとし、卒業生との連携教育の実践におけた方策について検討する。

3. 目的

卒業生を看護基礎教育における人的資源としてどのように活用できるのか、その方策を検討する。

4. 研修会の概要

1) 日時 2023年3月8日(水) 13:00~15:10

2) 場所 8201教室

3) 参加者 看護学科教員24名 (欠席2名)

4) プログラム

時間	内容
第1部 13:00~14:15	<p>◆ 講演(60分): オンライン テーマ:「卒業生のマンパワーを活かす連携教育の導入に向けて」 講師:札幌市立大学副学長・看護学部長 松浦 和代 先生</p> <p>◆ 質疑応答</p>
第2部 14:20~15:10	<p>◆ グループワーク(5G編成:4-5人/G) テーマ:本学部における卒業生との連携教育について</p> <p>①これまでに実施した卒業生への支援、連携の内容(領域、委員会等)</p> <p>②今後、卒業生との連携においてどのような機会や役割が考えられるか</p> <p>◆ 発表・共有</p>

5. プログラム内容の概要

1) 第1部 講演

(1) 札幌市立大の理念と歩み

建学の精神、教育研究上の理念、大学の歩み(2006年開学:看護学部とデザイン学部の2学部)、看護学部の教育目的、育成する人材像

(2) 3ポリシーと「同窓の絆」支援の方針

3ポリシーの他に、4つ目のポリシーとして「同窓の絆」を定め、卒業生・修了生が同窓の絆で結ばれているとともに、卒業後・終了後においても学びを継続できるよう支援をしている。

主な支援方針は、①同窓活動支援、②キャリアアップ支援、③生涯学習支援である。

(3) 卒業生を支援する体制づくり

過去2度の文科省GP獲得を契機に、新卒者のシームレスな「社会化」を支援する

ことを目的に「往還型研修」として①シャトル研修、②卒業前スキルアップトレーニングの2事業を構築した。

①シャトル研修

対象：卒業生 回数：就職4か月、8か月、2年の年3回開催

内容：メンタルヘルスやキャリアアップセミナーの講演やグループワーク

②卒業前スキルアップトレーニング

対象：4年次生 内容：看護技術トレーニング

特徴：支援体制として、キャリアアドバイザーやOG/OBインストラクターが協働

これらの「往還型研修」により、卒業生の社会化を支援し、3年目、5年目の離職防止にも貢献できる可能性があり、新人看護職員の「社会化」支援(SCUモデル)を構築した。

(4) 連携教育の実際（コロナ禍での実施状況）

①シャトル研修：新卒者を対象に、オンラインにて講演会「ストレスとコーピング」および近況報告を実施した。

②卒業前スキルアップセミナー：参加率は65～75%、教員の他、所属機関から派遣されたOG/OBインストラクターやキャリアアドバイザー(看護師資格者をキャリア支援員として雇用)が技術指導を行う。学生は技術の向上だけでなく、現場や就職先の状況を直接聞く機会になること、OG/OBインストラクターは自分自身の学修、新人の気持ちの想起など好意的な評価であった。さらに派遣先医療機関の管理者からも、OG/OBインストラクターを経験することによって患者との接し方やプリセプターとしての意識の向上がみられるため、派遣に協力的であった。

③キャリア支援室：医療機関の看護部長(現役/経験者)を非常勤講師として招聘し、就職試験模擬面接を実施した。

(5) 今後の課題

変化する入学生の気質やコミュニケーションスキルを正しく認識していくこと。また、卒業生にとって母校とは何か、母校に何を求めているのかをタイムリーに把握し、どのように繋がるかを継続的に検討していくことが必要である。

2) 第2部 グループワーク

(1) これまでに実施した卒業生への支援、連携の内容

<p>大学/学部</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・過去にホームカミングデーを開催した。 ・臨地実習連携委員会を設置し、臨地教員との連携を図っている。 ・資格ガイダンス時に、卒業生(養護教諭)に依頼し学生との情報共有の場を設定している。 ・本学での新型コロナワクチン職域接種の際、看護師として依頼した。 ・本学研究科への進学や、本学の教員として研究・教育活動に従事し
--------------	--

	ている。
授業	<ul style="list-style-type: none"> ・講義の外部講師（認定看護師） ・OSCE の SP ・ゲストスピーカー（小児領域、災害看護等） ・クリティカルケア領域の看護師の卒後教育プログラムとして、卒業生に講師やファシリテーターを依頼。 ・ICLS の実践にあたり、認定看護師の資格を持つ卒業生に講師を依頼。（コロナ禍で実施できず）
実習	<ul style="list-style-type: none"> ・実習前に臨地教員に技術指導と情報提供を依頼。 → 臨地教員との連携は、領域によって程度に差がある。 ・実習指導者や非常勤助手として依頼。 → 卒業生が実習施設で看護職として従事していることで、臨地での実習指導や教員との情報交換がスムーズである。
委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・国家試験対策委員：ゲストスピーカーとして依頼（コロナ禍以降、実施できず） ・IC 講演会：ゲストスピーカーとして依頼 ・入試広報委員会：入試ガイドへの掲載依頼（就職先、インタビュー、写真） ・キャリア支援：ゲストスピーカーとして依頼（就職活動を中心とした学生へのメッセージ）
就職施設からの協力依頼	<ul style="list-style-type: none"> ・成人看護学領域：日立総合病院の卒業生から、学生を病院避難訓練の患者役として協力依頼があった（学生 30 名）。
*他学年交流	<ul style="list-style-type: none"> ・2 年次生の援助技術の授業において、4 年生に演習補助役としての参加を募り、援助技術の再認識の学修の場になっている。 ・アドバイザー内での、1~4 年次生の交流が図れていたが、コロナ禍で実施できない状況が続いている。

(2) 今後、卒業生との連携においてどのような機会や役割が考えられるか

現行の実施内容の継続や再開	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲストスピーカー、OSCE での SP、キャリア支援への協力。 ・アドバイザー内での、1~4 年生の交流の機会を設けることで、卒業後も学生同士がつながる機会ができるのではないかと。 ・公衆衛生生の領域では、勤務先がばらつき、職場内に同期がほぼいない状況であるため、メンタルサポートの機会としてホームカミングデイで集まれるのは良い。しかし、週末はほとんど勤務があると聞いているため、開催日時などは検討が必要である。
現行の実施内容の発展	<ul style="list-style-type: none"> ・OSCE では、SP だけでなく、課題の作成や評価者として、また、現場で働くプロフェッショナルとして企画や評価まで協働していただけると良い。 ・OSCE の見学でフィードバックの機会を設け、その後、SP や評価者として依頼するなど、段階的な関わりの仕組みができると良い。 ・実習病院(施設)や看護部長(施設管理者)との連携強化を図る。

	<p>例：授業等の講師依頼や、OSCE・模擬授業での SP 依頼、実習前の教員研修の受入れ、臨地実習指導者(卒業生)の選定、就職模擬面接の指導等</p>
<p>新たな取り組みの検討</p>	<p>【看護技術の習得】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎看護領域の技術演習にも SP や指導者としての依頼を希望する。 →その際は、大学側が教示する技術を明確にし、そのうえで臨床でのスキルや経験を上乘せしてもらえると良い（教科書には忠実にするなど）。 ・卒業前の技術指導の機会は有用であり、特に、指導者の勤務先を提示することは良い。技術の習得の他に、先輩看護師の話聞いて入職前に精神的な安心感を得ることが出来る。 ・4年生の国試後に技術指導の機会を設ける。技術のみならず、就職後のメンタルサポートや情報提供も兼ねる。 →領域間で教授した技術項目の情報共有や、コアコンピテンシー（卒業時到達目標）などを用いて客観的に評価し、学生個人における技術習得のポートフォリオなどを作成して卒業時に教授すべき技術を精選することが大事。 <p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学教員が集合研修などの講師や看護研究の指導を行う。 ・教室/実習室/物品の提供、シミュレーションセンターの活用、研修の企画等 ・1期生が卒業して14年(35歳前後)が経過し、医療機関ではリーダーや主任など中間管理職のポジションであるため、マネジメント研修が必要ではないか。 例：キャリア開発やリーダーシップ、コーチングなどの管理面への支援や、メンタルケアやアンガーマネジメントなどの精神面への支援をテーマとした研修 ・連携事業のための資金の獲得 ・卒業生の状況の把握(動向調査) ・コロナ禍で学生生活を送った卒業生へのメンタルサポート ・2～3月の就職前に自主ゼミのような機会を作り、演習の機会を設定する。 その際、在校生にも周知し、卒業後も学生間が繋がれるようきっかけをつくる。 ・キャリア支援の一環として、臨床から卒業生に来てもらい、看護師の（特に夜勤など）働く様子を聞く機会を設ける。

6. 実施後アンケート結果 回答者数：22名 回収率：91.7% (22/24名)

1) 第1部 講演「卒業生のマンパワーを生かす連携教育の導入に向けて」について

【内容】・とてもよかった：20名

・よかった : 2名

- 【感想】・臨地の看護部長とのコミュニケーションは卒業生とのつながりに大きな影響があると思われた。お互いに協力できるような関りが大事だと思った。
- ・具体的にわかりやすい講演でよくわかりました。本学よりも開学時期が遅いにもかかわらず、取り組みが先進的でとても参考になりました。
 - ・卒業生のマンパワーを活かし基礎教育に応用する具体例を示していただき、大変参考になりました。卒業生と相互に支え合う連携が今後の基礎教育にも継続教育にも重要であると感じました。ありがとうございます。
 - ・具体的な取り組みがわかりやすく紹介されており、とても有意義な時間を過ごせました。積極的な取り組みの姿勢に感服いたしました。
 - ・具体的な内容が多く、とても参考になりました。
 - ・他大学の組織された取り組みを知る機会になりました。設置主体が異なることから、難しい面もあると思いますが、卒業生との連携や異学年交流などのヒントを得ることができたと思います。
 - ・他大学の取り組みなどを今後参考にしていきたいと思います。看護学部も他学部との連携を図っていく必要があると思いました。
 - ・とてもわかりやすいご講義で、多くの示唆をいただきました。
 - ・学生たちを思う気持ちが連携教育につながっていく様子を窺うことができた。新規事業をと力むのではなく、日々の教育を見つめることにより、必要な教育がみえてくるということにきづかされた。
 - ・組織一体となって取り組んでいるところや是非導入したいと思う点が多々あった。
 - ・札幌市立大学の卒後教育の取り組みがよくわかりました。やはり参加率は高くはありませんが、参加者が就職してからの話を思い存分話す機会になっていることが一番良いことだと思いました。
 - ・デザイン学科との連携教育、シャトル研修、卒業前スキルアップトレーニングの取組みに感動しました。臨地実習連携委員会を有効活用して本学でも取組めるヒントを頂けたように思います。
 - ・支援する視点と支援される視点がとても印象に残っています。
 - ・具体的な話をたくさん聞いたのが良かった。
 - ・卒業生を卒業してもフォローをしていくという考え方がなかったので、とても発想の転換が必要なのだと思います。卒業生を巻き込んで教育することで、卒業生にとっても在校生にとってもウィンウィンの関係になると思いました。
 - ・さまざまな取り組みを紹介していただき、とても参考になりました。看護学科でできることを検討する心強いきっかけをいただけたと思います。
 - ・素敵な取り組みをされていて、大学は卒業生にとっての心の拠り所になれるのだと感じました。

2) 第2部 グループワークについて

【内容】・とてもよかった：13名

・よかった : 8名

・よくなかった : 1名

- 【感想】・以外に卒業生を支援する体制が分からなかった。小さなことから実施していけるようなシステムを作っていく必要があると思った。企画をしていただいた先生に感謝申し上げます。お疲れ様でした。
- ・話が今一つ焦点化されず、今までこんなことをやっていたという内容に終始してしまいました。発展的にどうしていけばよいかという話合いに時間を割けばよかったと思いました。
 - ・コロナ禍で外部から卒業生を招くということが十分にできていませんでしたが、これまでの経験を共有でき、今後、Post コロナでは活動を検討できると良いなと感じました。
 - ・それぞれの教員が、積極的に意見を述べられており良かったと思います。
 - ・短い時間ではあったが、何を話し合うのか明確にされていたため、話し合いがスムーズに行うことができた。着任年数が浅い教員が固まっていたので、今回の話し合いの内容では、ばらつきがあったほうが良かったと感じた。(特にこれまでの取り組みの共有などの時に不便を多少感じました。)
 - ・他領域の取り組みや過去の実践を聞かせていただき、さらに発展させるためにはどうしたらいいかなど、先生方とのご意見から考える機会になりました。
 - ・他領域の先生と意見交換ができ、とても有意義な時間でした。意見交換の時間がもう少しあると良かったと思います。
 - ・日々の活動を共有するうちに、新たなアイデアが生まれてきて、貴重な時間になった。
 - ・意見交換による情報の共有化が図れ、課題にも気づくことができ、たいへん有効な時間だったと思う。
 - ・各グループから出された意見が、卒業前技術練習、オスキー、国試対策など具体的ですぐにでも実行できそうなことだったので、この機会に前向きに検討し卒業生とつながれたら良いなと思いました。
 - ・他領域での実践内容や、先生方の教育観・今後の希望などを聞き合える機会になり、良かったです。何らかの実施事項について諸々決定しなくてはならない会議時とは異なって、他領域の先生方と緩やかに話ができる機会となりました。
 - ・大学でどのようなことに取り組んできたのか、あらためて確認できました。継続が課題だとわかりました。
 - ・やってみたいアイデアがたくさん得られた。
 - ・もう少し時間があると更に良かったと思います。
 - ・短時間ではありましたが、とても有意義な意見交換ができました。大学側から病院施設に赴くことで、臨床現場と大学との橋渡しになるのだと改めて思いました。企画・運営をありがとうございました。
 - ・先生方からこれまでの大学での取り組みを教えていただき、これからを一緒に考える機会をいただき、とても勉強になりました。

3) 今後、学科FD研修で取り上げてほしい内容

- ・今回のテーマをもとに、自大学で出来ることなどを具体的にしていくのも良いかと思います。
- ・このテーマを具体化するための、発展的な内容も良いと思います。
- ・今回のテーマの実現に向けてワークショップはいかがでしょうか。
- ・OSCEについて（内容の刷新や再確認のため）
- ・新カリになり、地域在宅看護学実習Ⅰ、Ⅱが始まりました。これについて先進的な取り組みをしている大学の先生のお話を聞きたいと思います。
- ・経営学部や食物学科と看護学部との連携教育
- ・意見交換する機会が重要だと思いました。

7. まとめ

研修会テーマの決定に際し、委員会で①卒業生との連携教育の導入(今回のテーマ)と②多職種連携教育(IPE)の導入の2テーマを提示し、学科会議にて検討の結果、①卒業生との連携教育の導入に多くの賛同を得たことから、教員の興味関心が高い内容であったのではないかと考えられる。また、学部開設20周年という節目であることや、コロナ禍で従来のように卒業生との連携ができない状況であること、本学文学部のNICE設立もこのテーマへの関心を高める要因となったと考える。

第1部の講演では、卒業生との連携に先駆的な事業を展開している大学から、具体的な取り組みの紹介をいただき、多くの示唆を得る機会となった。そのなかで、予算の確保や具体的な事業内容の検討も重要であるが、本学部として卒業生をどのように捉えるか、どのような関係を構築していきたいかという、明確なビジョンを根底に位置づけることが最も重要であると感じた。さらには、事業を企画、実施するだけでなく、その結果を評価し再構築していくという過程に丁寧に取り組んでいくことが、有効な事業として継続していくためには必要である。

第2部のグループワークでは、これまで各授業や委員会等で行われていた卒業生との連携活動が共有されることがなかったため、学科全体で認識する機会となった。さらに、これらの活動内容や、第1部の講演内容から、今後の実践にむけた多くの案が話され有意義な時間であった。アンケートからはこのディスカッションの設定時間が短かったという意見もあり、運営上の課題としながらも、教員が具体的な検討に意欲的な姿勢であったと評価できる。

今回の研修会は、本テーマの実践にむけた動機づけに過ぎないため、より具体化していくための検討の場が必要になる。このことに関して、アンケートでもさらなる検討を希望する意見がみられる。また、この実践は「教育の内部質保証」の評価指標にもつながるため、学科として早急に検討をしていきたい。

報告：若林千津子（看護学部看護学科）

経営学部

テーマ：『他教員の経営演習の運営を学ぶ』

概要：

経営演習は教員の個性や考え方が強く反映される科目である。それぞれの教員が一定の教育効果を期待し、その効果に対してどのようにアプローチすれば良いかについて試行錯誤しながら演習の運営を行っている。今回の研修では、演習の運営方針等について、講師にそれぞれ 20 分程度レクチャーして頂いた上で質疑応答を行う。

演習に関する試行錯誤の過程や現在の運営方針等を教員間で共有することにより、各自の担当する経営演習の運営に資する情報を提供することが本研修の意図である。

講師：

本学経営学部 准教授 栗原 正樹

本学経営学部 准教授 澤端 智良

実施日時：2023 年 3 月 14 日（月）12:40～14:10

会場：11 号館 305 室

参加者：申美花、長島正浩、栗原正樹（報告者）、澤端智良（報告者）、田口尚史、菅野雅子、佐藤和明、渡部暢、Yodtomorn Pimprapa

報告：Yodtomorn Pimprapa（経営学科）